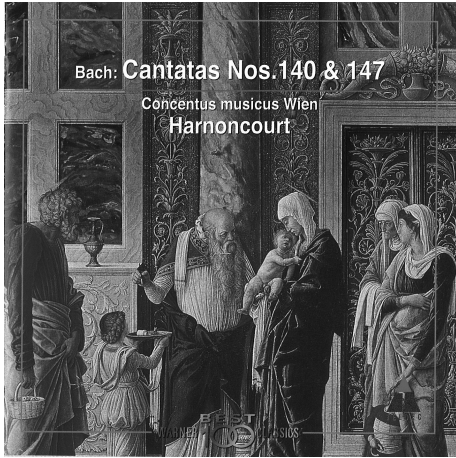


commons: schola vol. 1
Ryuichi Sakamoto Selections: J.S. Bach
原典解説



バッハ：カンタータ第140番 & 第147番

アラン・ベルギウス (ソプラノ)
 シュテファン・ランブフ (アルト) [BWV147]
 クルト・エクヴィルツ (テノール)
 トーマス・ハンブソン (バス)
 テルツ少年合唱団
 ウィーン・コンツェントウス・ムジクス
 指揮：ニコラウス・アーノンクール

録音：1983年 [第140番]、1984年 [第147番] ウィーン

CD：WPCS-21092 ¥1,050 (税込)

発売元：株式会社ワーナーミュージック・ジャパン

(schola vol.1 CD track 1 & 2)

ヨハン・セバステイアン・バッハの音楽を現代において演奏する場合、バッハの生きていた時代に使われていた楽器と演奏方法を可能な限り再現して演奏する試みが現在では主流である。これを「ピリオド・インストゥルメント(楽器)による演奏」と呼ぶが、こうした演奏法の試みを体系的に始めた人物がニコラウス・アーノンクール(1929〜)である。彼はドイツ、ベルリン生まれだが、育ったのはオーストリアのグラーツで、ウィーンでチェロを学びウィーン交響楽団のチェロ奏者となった。しかし、1953年に

「ウィーン・コンツェントウス・ムジクス」を結成して、ピリオド奏法の探究を始めた。アーノンクールはオランダの先駆者グスタフ・レオンハルトと協力して、バッハのカンタータ集の全曲録音を開始し、それは現在60枚組のCDセットとして残されている。ここで聴く「カンタータ第140番&第147番」はいずれも1980年代の録音で、バッハのカンタータの中でも名作として知られる2作品である。特に第147番の第6曲のコラールは「主よ、人の望みの喜びよ」(マイラ・ヘス編曲)として日本

では知られている有名な旋律をリトルネッロ(繰り返し演奏される器楽部分)として使っている。第140番のカンタータは第4曲のコラールが収録されているが、これはテノール独唱によるもので、ここではクルト・エクヴィルツが歌っている。ヴァイオリンとヴィオラの名旋律を、バッハは後にオルガン曲に編曲している。器楽部分はもちろんアーノンクールの盟友ウィーン・コンツェントウス・ムジクスが担当している。収録された曲には出てこないが、いずれのカンタータでもオーボエやオーボエ・ダ・カッチャが活躍する。